

# ミャンマーの病院でのインターンシップ

—現地で学んだ国際協力に大切な心—

## Internship Activity at Hospital in Myanmar:

The Lesson I Learned;

Important Mind for International Cooperation

佐賀大学経済学部 山口 諒真

YAMAGUCHI Ryoma

(Faculty of Economics, Department of Economics, Saga University)

キーワード：国際協力、ミャンマー、海外インターン

### 〇はじめに

私は文部科学省が官民協同で実施している、「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」の1期生として、東南アジアのミャンマーという国へ2014年8月から2015年2月にかけてインターンシップ留学をさせていただきました。この期間の経験は私にとってかけがえのないものになりました。お世話になったトビタテ！留学 JAPAN の職員の皆様、佐賀大学の教職員の皆様、インターン先の職員の皆様、その他関係者の皆様には心から御礼を伝えたいです。本当に有難うございました。

### 〇トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムとは

最初に「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」という留学奨学金制度を紹介させて下さい。トビタテ！留学 JAPAN は文部科学省が民間企業と官民協同で取り組む留学促進キャンペーンで東京オリンピック・パラリンピック競技大会が実施される2020年までに大学生の海外留学の倍増を目標としています<sup>1</sup>。

この留学制度は留学を志す学生にとって非常に魅力的なのでその特徴を3つ挙げていきます。1つ

<sup>1</sup> 制度の実施は日本学生支援機構が行っている。

目は、「返還不要の充実した奨学金」です。海外渡航費や月々の活動費などプロジェクト奨励金として年間最大300万円の返還不要の奨学金が支給されます。この奨学金のおかげで金銭的な問題が理由で留学を諦める必要がなくなります。希望する学生には等しく留学のチャンスが与えられています。私にとっても金銭的なストレスなくインターンシップ留学ができたことは、現地での活動に集中することに繋がり非常に濃い留学期間を過ごすことができました。また海外の大学・大学院等への留学以外にも、私のような海外でのインターンシップやボランティア活動など、従来の枠にはまらない独自の留学もこの奨学金制度の支援対象になることも大きな特徴です。なお、この奨学金の財源は各分野で活躍されている方々や民間企業からの御支援や御寄附などにより成り立っています。

2つ目の魅力は、「留学計画と向き合う事前・事後研修」です。トビタテ！留学 JAPAN の派遣留学生に選抜された学生は留学前に国内で事前研修を受けることとなります。先ほど述べたようにこのプログラムの派遣留学生は一人ひとりが独自の留学計画で留学します。事前研修では各自の留学計画をより充実した留学になるようブラッシュアップをおこないます。研修中は社会で活躍しているグローバルリーダーや派遣留学生の同期とお互いアドバイスを行ない、自分の内面と向き合うワークショップを通じて留学への心構えをつくります。留学後は事後研修を通じて、留学中の経験を自分の中で整理します。私は事前研修では周りの学生のレベルの高さに驚き、自分自身の未熟さを痛感しました。この時の感情は筆舌に尽くしがたいですが、悔しさや憧れが入り混じっていたように思います。この悔しさや憧れは留学中に自分を鼓舞してくれました。留学を終えてからの事後研修では、留学前の自分と留学後の自分の変化に気付き、それを言語化できるようになったことで、留学での成長を強く実感しました。

3つ目の魅力は「トビタテコミュニティ」です。トビタテ！留学 JAPAN には全国47都道府県から様々な分野の学生が選抜されています。それぞれの学生の専門分野や興味関心も多様で、一人ひとりがキラキラと夢や目標を語り応援し合えるコミュニティがあります。トビタテコミュニティでは、人生を変えるような出会いやきっかけがたくさん生まれています。上記に述べた、充実した奨学金や研修も魅力的ですが、このコミュニティでの仲間との出会いが私にとって最も貴重なものになりました。トビタテ事務局の職員の方々も人生を捧げてこのコミュニティ形成に並々ならぬ愛情を注いで下さっています。留学を終えて帰国した学生もエバンジェリスト活動として留学の魅力発信や、コミュニティ活性化を積極的に行なっています。私自身もこのコミュニティの発展に貢献したいと思っています。

## ○マンマーへインターン留学を決めたきっかけ

私は4歳の頃からレスリングをしていました。レスリングが大好きでオリンピックに出場したいという夢もありましたが、なかなか強くなれませんでした。大きな大会に出場しても、あと一歩という

ところで試合に勝てず、中学を卒業するタイミングでレスリングでの夢を諦めてしまいました。勉強もそれほど得意ではなく、スポーツでも挫折して、もやもやとした気持ちで高校生活を送っていました。そんな時に、たまたまテレビで観た情熱大陸という番組で、ミャンマーで医療活動を行なっている吉岡秀人医師が紹介されていました。ミャンマーで目の前の患者さん一人ひとりと向き合い懸命に治療を行う姿を見た時に、自分も一生に一回くらいはこのような現場に行って、この様な人たちと働いてみたいと強く思ったことが海外インターン留学を希望するきっかけになりました。

## ○現地での日常生活

多くの読者の方にとってミャンマーは身近な国ではないと思いますので、現地での日常生活の一部を紹介させていただきます。ミャンマーは熱帯気候で夏季、雨季、乾季の3つがあります。私が滞在した雨季の時期には、毎日のようにスコールが降り、干していた洗濯物を急いで取り入れていたことを思い出します。乾季の時期は気温もそれほど高くなく非常に過ごしやすいため観光にはおすすめのタイミングです。観光と言えば、ミャンマーにはたくさんのパゴダ（寺院）があります。全人口の約8割程度が仏教を信仰しているミャンマーでは至る所にパゴダが存在し、僧侶や仏教徒の方がお祈りしている姿を見かけます。タクシーの中にパゴダの置物があったり、信号待ちの時間に手を合わせて拝んでいたりと日常生活の中に仏教が溶け込んでいるように感じました。ミャンマーにはミャンマー料理というものがあります。ミャンマー料理は米が主菜で、副菜のカレーなどと一緒に食べる人が多いです。外食することも多く、屋台などではシャンカウスエーやモヒンガーなどの麺料理もよく食べられていました。麺類は多くの日本人の口にも合うのでぜひミャンマーに行かれる際には食べてみて下さい。



写真1：ミャンマーでも有名なシュエダゴンパゴダ

## ○現地での活動

現地の病院でのインターンシップを開始するにあたって、周りの医療従事者の方が手術などで患者さんを助けていく中で、私は医者でもないし看護師でもないの、人の命を救えない、こんな自分に何ができるのだろうかと悩んでいました。そんな時に私はミャンマーの入院患者さんが抱える2つの課題に気づきました。1つ目は、ミャンマーには医療保険の制度がなく、患者さんは入院中に働いてお金を稼ぐことができないためお金に不自由すること。2つ目は、患者さんは入院中ベッドで寝ている時間が多く、子供たちは学校に通うことができません。日本のようにテレビゲームなどの娯楽も少なく、入院が長引くにつれ患者さんの笑顔が失われていくことに気づきました。

そこで私は2つの解決方法を考えました。まず1つ目の解決策は、「入院ベッドを工房に」というプログラムです。患者さん自身が入院しているベッドの上でお金を稼げるような仕組みを作りたいと思い、ミャンマーで豊富な天然石を利用してアクセサリーをつかって販売し、患者さんが入院中にお金を稼げる仕組みを作ることになりました。

2つ目の解決策は、「入院ベッドを教室に」というIT教育プログラムです。ミャンマーではホワイトカラーの仕事が増えてきており、ワード、エクセル、パワーポイント、インターネットが使えることで、子どもたちに将来の仕事が見つかりやすくなります。また、ミャンマー国内では感染症が多いという現状を知ったので、エイズやB型肝炎、C型肝炎の正しい保健知識が学べる映像授業を届けたいと思いました。こちらのプロジェクトは途上国に映像教育を届ける活動を行なっているNPO団体とコラボレーションさせていただき実施しました。

プロジェクト実施に必要な資金は、クラウドファンディングで調達しました。最終的にたくさんの方からご支援いただいて、はじめはたった一人の思いつき、たった一人の想いで踏み出した一歩でしたが、最後にはみんなの夢、みんなの目標になって、このプロジェクトを実施することができました。たくさんの方々に応援、ご支援いただいたことを感謝しております。本当に有難うございました。



写真2：アクセサリープロジェクトの様子



## ○自分のエゴと向き合った日々

上記のプロジェクトを進めていく一方で、「これって本当に患者さんのためだけにやっているのだろうか？もしかしたら、自分自身が人から褒められたい、人に認められたい、そのような思いがあるのではないか？」と悩むことがありました。でも同時に、もちろん、ミャンマーの貧しい患者さんや、本当に困っている人達を助けたいという思いもありました。ただ、実際にミャンマーに行くことになった時には、ボランティアの気持ちだけでは行けなかったと思っています。ミャンマーに行ってチャレンジしたい、自分に何か凄いことができるのではないかというエゴの部分もあったと自覚しています。それが、最終的には自分の背中を押すかたちになり休学や留学に踏み切ることができました。その自分のエゴを現地で活動しながら気づかされました。クラウドファンディングをしてお金を集めて、プロジェクトを実施しても、「これって、人から褒められるからやっているのではないか？」と自分のエゴに悩みました。

その悩みの答えは入院患者さんから教えてもらうことになりました。日にちまで覚えています。帰国2週間前の2015年2月17日のお昼頃でした。自分がこのプロジェクトをやっている間に意味があるのかなと思いながら5ヵ月半活動を続けた中で、まさにこの日、患者さんたちがすごく楽しそうに心の底からの笑顔で「チェーズーティンパーデー」（ミャンマー語でありがとう）と声をかけてくれながら、ベッドの上ビーズアクセサリ製作でお金を稼いでいる姿を見たときに、少しでも患者さんのためになっていて、自分もやりたいと思うのであれば、エゴと善意の二つがあっていいのだと思うことができました。当初、エゴは悪いものだと思って、善意だけで頑張らないといけないと思っていましたが、善意だけでは頑張りが続けることは難しいと感じています。人のためになることで、かつ、自分のやりたいことであれば、そのエゴのエネルギーすらもポジティブな方向に発散されると考えています。「エゴ」と「善意」の二つが一つになったという感覚が、ミャンマーでの留学中に得た大きな気づきの一つです。

## ○おわりに：一歩を踏み出すことの大切さ

最後に、ヤンゴン国際マラソンでのエピソードを紹介させてください。私は毎週月曜日、ミャンマーの視覚障がい者の方が通う盲学校で職業訓練サポートをさせていただいていました。その施設で出会った、タートゥーという名前の男の子からこう言われました。「僕、マラソンを走ってみたい！」

しかし、彼は、今までの人生で400メートルを2回だけしか走ったことがないと言っていました。ミャンマーでは目の不自由な方が自由に運動できる環境が少ないのですが、彼自身が挑戦したいという意思があったので、チャレンジを応援させていただくことにしました。

少しずつ練習を始め、マラソン大会へ応募しました。すると出場不可能だと言われました。ミャンマーでは前例がないし、危険だからやめた方がいいという判断でした。でも彼は走ってみたいと本気

でした。私たちは諦めることなく練習を続けながら、視覚障がい者の方にあん摩の指導をしている方やミャンマー人スタッフの協力を得て、マラソン協会と出場の交渉を続けてもらいました。そして、最終的に出場を許可していただきました。私たちだけでは、出場することすらできませんでした。一歩を踏み出すことで周りも背中を押してくれるようになったのです。



写真3：ヤンゴン国際マラソンの様子

マラソン大会当日、私たちは緊張していました。練習でもハーフマラソン 21km という距離は一度も走ったことがありませんでした。正直、私は 21km を制限時間内に走り終えることは厳しいと考えていました。気持ちを高めて気合いで完走するために当日の朝、タートゥーに新しいランニングシューズをプレゼントしました（今まで上履きのような靴しか持っていなかったの）。それでテンションも上がり「絶対に完走するぞー！」と緊張もほぐれました。マラソンがスタートして走っていると、途中私たちを見て笑う人もいました。伴走用のロープを持って走っているのだから手は繋いでいたように見えたのかもしれませんが。でもそれ以上に「チョーザーバー！」（ミャンマー語で「頑張っ！」の意味）と声をかけて下さったり、一緒に横で走ってくれる心優しい方も多くいました。一歩を踏み出し続けるタートゥーに声援が集まるようになりました。途中しんどくなり立ち止まりそうになることもありましたが、タートゥーは最後まで諦めることなく走り続け、制限時間内に 21 キロのハーフマラソンを完走しました。



写真4：ゴールをしたときには多くの方からの声援があった

21kmを走れと言われると先が見えず誰もが途方に暮れてしまいます。しかし、途中にある次の1km、次の1kmと目の前にある目標に向かって、小さくてもいいから一步を踏み出し続ける。そうすると少しずつ、でも確実にゴールに近づいていきます。「本当に大切なことは、一步を踏み出し続けること。」タートウーの伴走をしながら、一步でもいいから踏み出し続けることが大切なのだということを教わりました。

留学や休学への一步を踏み出すことは、恐れや不安があるかもしれません。私自身も当初は休学や留学に対して不安がありました。今でも自分自身に揺るぎない自信があるわけでもなく、何か凄いことを成し遂げたというわけでもありません。小さい目標を一つ一つ積み重ねられたという実感が自分の中にあります。「あ、今日はこれできた。」とか、「一年後これもできるかもしれない。」と、小さなことでもいいからチャレンジしてみようという想いが、「あ、できた！」「自分にでもできるかも！」という一步を踏み出す勇気に繋がると感じています。

たった一人でも、お読みくださった方の一步を踏み出すきっかけになれたとしたらそれ以上に嬉しいことはありません。最後までお読みくださりありがとうございました